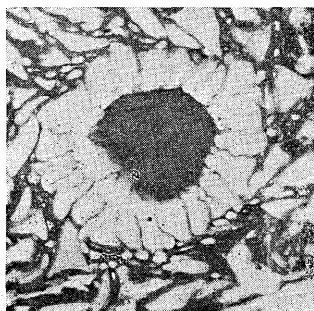


下つたのが二度目であると云う。後に私が Luang Prabang の知事(仏人)に会つた時に「先生があまりお氣の毒に見えたので、小使をつけて Saigon まで送らせた」とのことを見た。先生は Saigon から私あてに 300 バーツを送金して来られたが、この額は私が先生のために立てかえておいたお金には遙かに及ばなかつた。先生の御手紙には「若し送金が余分であつたら子供さんに何か買つてくれ」と書いてあつた。先生にはお金の値打は全然判らないように見えた。私は日本へ帰国された後も先生と文通をし、また人の評判を聞いて、先生が思つていたより遙かにえらい方であることを知つた。』(広島の旅舎にて記す)

○ミカズキモのピレノイドの構造 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Electronmicroscopic figure of pyrenoid in *Closterium*) 緑藻類其他の藻類から一部のコケ類にまで葉緑体中に存在するピレノイドについては従来 2通りの考え方がある。Timberlake (1901) がアミミドロ (*Hydrodictyon reticulatum*) を使ってえた知見では、その一部がたえず分離し、分離した部分が澱粉粒に変つて行くとした。多くの学者がこの説をとつているが、山内 (1913) は同属の他種 *H. africanum* (1913) で pyrenoid とでん粉は無関係とのべ Bold (1933) は蛋白質系の pyrenoid から澱粉粒のできることの無理をのべてゐる。Czurda (1928) はアオミドロ (*Spirogyra*) を使い、結局澱粉は葉緑体の本体から作られるが、pyrenoid の外側に層をなして沈積するのだという Schmitz (1882) のもとの説を再認した。ところで、この表紙カットは神谷平氏がミカズキモ (*Closterium sp.*) の細胞膜の構造を電子顕微鏡で研究中に副産物として撮影された写真を好意で提供されたのであるが、ミカズキモは *Spirogyra* とは近縁であるから、上の論争の解決に役立つであろうと思う。中心の黒いところは central protein body 又は Czurda が pyrenocrystal という部分で蛋白質から成るとされている。その廻りの菊花の弁の部分が恐らく starch envelope に当るであろう。なお左下部で central protein body がへこみ、菊花紋が二重弁にみえるところは、前者がちぢんでなれたために生じた変形で、腔室は菓子の鹿の子の小豆のように一皮だけ並んで作られているとみてよい。この部分は更にその外側の黒い波模様の葉緑体の主体部と共に明らかな構成物であることがわかる。従つて Schmitz-Czurda 説の方が妥当であろう。ただ重要なことにこの多数の腔室 (?) 中に澱粉がどの様にたまるのか、また腔室は何で出来ているのかが今後解明を要する問題である。終りにこの写真を提供された神谷平氏に感謝する。



写真は電子顕微鏡で 1000 倍にうつしたもの引きのばして約 3800 倍になっている。